

町史編さんだより

【写真】 昭和中期ごろ、根雨のまちなかを走るバス（左）、日ノ丸バスで通学する小学生（昭和58年、右）



『町内の路線バスのあゆみ』

「日野町誌 続編」の中から、町営バスに至るまでの路線バスの歩みについて紹介します。



▲町営バスに住民の要望に応え（平成18年11月、三土）
 ▲四十曲峠を越える湯原のバス

路線バスは、鉄道と並んで私たちの生活交通機関として利用されています。しかし、自家用車の普及とともに利用者が減り、その運行形態もさまざまな変遷がありました。日野町でバスが運行されはじめたのは、昭和30年代には、日ノ丸バスが米子・根雨間、また根雨から黒坂・生山、奥渡、真住、新庄（板井原）方面に運行していたほか、中鉄バスが根雨・湯原間を運行していました。

「過疎バス問題」が生じる

バス利用者の大幅な減少により、乗客のないバスを表現する「過疎バス」問題が生じ

てきたのは昭和46年ごろからです。これは、自家用車の普及と農山村の人口減少が直接の原因です。全国的な傾向といわれ、国や県、市町村が赤字を補助金としてバス会社に補てんし運行を支えました。本町における昭和48年の町補助金は134万円でしたが、3年後の昭和51年には936万円と大きく膨らみました。また、昭和51年、県内に123の路線を持つ日ノ丸自動車株式会社は、赤字経営を理由に、県内の「過疎バス」路線の整理（廃止）案を発表。翌52年には追加廃止案を県に申し入れ、これが実施されると、町内を運行する路線はすべて廃止となります。町では、この問題に対処す

るため町過疎バス対策協議会を発足、また全世帯を対象に「過疎バス意向調査」を実施した結果、約8割の町民が存続を望みました。存続を要望した結果、運行のワンマン化・合理化を図ること、また町がバスの利用促進、赤字補てんに協力することなどを条件に、引き続き運行されることになりました。その後、町の補助金は一時減りましたが、昭和56年以降再び増加傾向に転じました。

代替バスへの移行

平成5年ごろから代替バスへの移行が検討されはじめました。代替バスとは、町が路線を引き継ぎ、貸切バス事業者に運行を委託するものです。平成7年10月、日ノ丸自動車から提案があり、町過疎バス対策協議会の開催や利用者との話し合いを進めた結果、平成8年3月、日ノ丸自動車から町内路線を廃止。4月から日ノ丸自動車に委託して、代替バスの運行を開始しました。これは、利用する人にとつては、今までと大きな違いはなく、移行後も、補助金（運行赤字額）は増え続け、平成14年度には1915万円と高額になるなど、問題は深刻化していききました。

町営バスの運行開始

平成16年、町は自立政策を推進する中で、町営バスの運行を検討しました。町営にすることで、運賃は町の収入となるほか、委託経費の削減が図られ、町の考え方を反映した運行が可能でした。課題の一つであったバス購入経費も宝くじ協会の助成金が見込まれたことから実施に踏み切りました。平成17年9月、助成金を受け3台のバスを購入、10月には公募により運行事業者を日本交通株式会社米子営業所に決定しました。

運行は、平成18年1月4日から、菅福線、奥渡線、板井原・真住線の三路線でスタート。これにより新たに黒坂のまちなかや下榎の集落内を通る路線を整備したほか、以後、地域の要望に応え、小原、三土地区まで路線を延長し、横路（秋縄）、三栗などの地区ではデマンド（電話予約制）運行を開始。平成19年4月からは、根雨のまちなかと日野病院の間を往復する根雨宿・病院線の運行も始めました。なお、現在も日ノ丸自動車が行う米子線（根雨・米子間）があり、日野町をはじめ沿線市町村が、運行距離に応じて赤字分を補てんしています。

読んでみたらんかな～

職員が勝手に
ススメる1冊♪
"今読みたい本"が
見つかるかも!?



『いわたくんちのおばあちゃん』

天野夏美 作 / はまのゆか 絵 / 主婦の友社

この本は、今から13年前に発行された実話にもとづくお話です。いわたくんちのおばあちゃんは、決して家族と一緒に写真を撮りません。それは、悲しい過去の記憶があるから…。広島に原子爆弾が落とされた日から現在、そして未来を考える1冊です。

あとがきに、『戦争なんてずっとむかしの話』、なんて思わんでね。ひょっとしたら、『未来の話』になるかもしれんよ。『未来』、それは、君たちみんながつくっていくものだからね。」とあります。以前は、小学校の教科書にも掲載されていました。小学生にはぜひ読んでもらいたい1冊です。

広島平和記念資料館本館も改修工事を終え、4月25日にリニューアルオープンしました。私も近いうちに、また訪れてみようと思っています。

この本を紹介してくれたのは…

日野町図書館長
生田 求

4月から新たに館長として着任しました。3月まで教員として勤めてきた経験を生かしながら、本を読むことの楽しさや大切さを伝えられたら幸いです。また本だけでなく、たくさんのイベントや行事を通し、日野町図書館の魅力をさらに引き出していきたいと思います。



『海近旅館』

柏井 壽 著 / 小学館

海・旅館・おいしい魚。いいな、なんて軽い気持ちで手にした1冊でしたが、さらさらと読めて、心に残る1冊となりました。

ひよっこ若おかみがいろいろなお客様に出会いながら成長していく物語ですが、私自身も多くのことを学ぶことができた本だと思います。

子育てをしながらの久しぶりの社会復帰に、1日があっという間でうまくいかないことも多く、あらためて子育てと仕事の両立の難しさを感じる毎日です。そんな中でもふと海近旅館で心に残った言葉が頭をよぎることがあります。「お客様はけっして神様ではありません。でも、ときどき神様がお客様になってお越しになることはあります」という言葉は、本当にその通りだと思うことがあります。

日々の中で、きっと私が気付いていない場面でも多くの人に助けってもらって今の生活ができていいるのだと感じることがあります。小さなことにも感謝を忘れず、一日一日を大切に頑張っていこうと思わせてくれた1冊です。



この本を紹介してくれたのは…

学校司書
吉岡 真純

4月から根雨小学校(月・水・木)と黒坂小学校(火・金)で学校司書をしています。皆さんと本との出会いのお手伝いができるよう頑張りたいです。よろしくお願ひします。

